

第173回定期演奏会

～英国音楽が描く心象的風景～

2020年1月10日(金) 18:00開場 18:45開演

三井住友海上しらかわホール

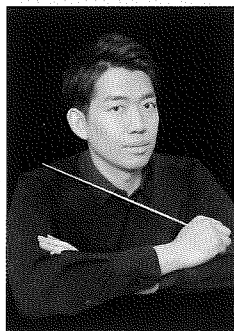
指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)

エルガー:演奏会用序曲「フロワサール」Op.19

ホルスト:サマセット狂詩曲Op.21

ブリテン:シンフォニエッタOp.1

バリイ:交響曲第3番ハ長調「イングリッシュ」



©Hikaru Hoshi

次回の第173回定期演奏会は「英国音楽」の特集である。普通は「英国」ではなくカタカナで「イギリス」と呼ぶことの方が多く、このイギリスという言葉は英国の人に言わせると、正しくないようである。英国とはあくまでもUnited Kingdomであり、4つの国の連合王国であるという認識が重要なのだそうだ。分かりやすく言えば、今年日本で行われたラグビー・ワールドカップ2019を考えてみれば良いだろう。ラグビー発祥の地からイングランド、ウェールズ、スコットランドそしてアイルランドが参加していたのはご承知のこと。この4つの連合国がUKである。ただ正式には、英国は北アイルランドだけを含むが、さすがラグビーの世界では南北は統一して参加することになっているようだ。いずれにせよ、イギリスとはイングランドのことであり、決して連合王国全体を表す呼び方でないことだけは知っておきたい。

さてそのイギリス音楽を辿ると、17世紀のバロック時代に活躍したパーセルに行き着く。大陸の音楽と渡り合うことの出来るイギリスが真に誇れる作曲家であった。そのパーセルが36歳で夭折した後、イギリスは音楽を消費するだけで創造することを忘れてしまったように思える。ドイツ人たちから「音楽不毛の地 — 音楽を持たない唯一の文化国民」と揶揄されるほど空白の時代が続くこととなった。こうしたイギリス音楽界に起死回生のごとく現れたのがエルガーであったのは間違いない。エルガーから始まる一連の音楽運動を、イギリスでは「音楽のルネッサンス」と呼んでいるほどである。次回の定期演奏会に登場する作曲家たちは、イギリス音楽のルネッサンスを担った重要な作曲家たち、それもすべてイングランド生まれ、つまり「イングリッシュ」という言葉が最も相応しい作曲家たちである。

●エルガー:演奏会用序曲『フロワサール』Op.19

エドワード・エルガー(1857~1934)と言えば『威風堂々』である。ロンドンで毎年夏に開催されるプロムス音楽祭では最終夜の定番中の定番曲である。たとえ作曲者や曲名を知らなくても、テレビのCMやBGM或いは卒業式などの機会音楽としてお馴染みであり、英国では歌詞が付けられて第二の国歌として広く親しまれている。エルガーをもっと知りたい人には『交響曲第1番』や『チェロ協奏曲』がおすすめである。エルガーの深いロマン性に間違いなく引き込まれるはずだ。またもう少し音楽的な意味でエルガーを知りたいければ『エニグマ変奏曲』は参考になる。エルガーが卓越した作曲技術を持っていたことが分かるであろう。

さて、フロワサールは英国の百年戦争およびそれに続くバラ戦争の顛末を記した年代記作者のことである。「序曲」はこの年代記に基づいて歴史物語を描写している。事前に英国史を知ってから聴くとさらに理解は深まるであろう。

●ホルスト：サマセット狂詩曲 Op.21

宇宙を描いた壮大な音絵巻物が組曲『惑星』。その第4曲『木星』は平原綾香が取り上げてポップスの名曲としても広く知られるようになった。作曲者はもちろんグスターヴ・ホルスト(1874~1934)。ホルストは大規模な管弦楽や吹奏楽の作曲家として知られており、またイングランド各地の民謡や東洋的な題材を用いた作品を数多く生み出してもいる。

サマセットはイングランド南西部にある州の名前である。ホルストはイングランドの民謡に取材した数多くの名旋律を生み出したが、この作品も冒頭、郷愁を誘うようなオーボエ・ダモーレのメロディーが印象的である。

●ブリテン：シンフォニエッタ Op.1

ベンジャミン・ブリテン(1913~1976)は、音楽教育の現場ではお馴染み『青少年のための管弦楽入門』の作曲者として知られている。大変分かりやすい音楽であるが、時代的には実験的な手法が数多く試されており、そうした傾向を表す作品もある。しかし基本的には機能と声法に基づいた保守的な傾向を特徴としており、その意味では英国の新古典主義を代表する作曲家と言えるだろう。個人的には、ブリテンが日本を訪れた際に鑑賞した能『隅田川』からヒントを得た教会上演用寓話『カーリユー・リバー』を忘れることが出来ない。隅田川を架空のカーリユー・リバーに置き換えたかなり斬新な演出と音楽は新鮮味に溢れていた。小さな交響曲を意味する「シンフォニエッタ」もブリテンの代表作の一つである。

●パリー：交響曲第3番 ハ長調『イングリッシュ』Op.21

チャールズ・パリー(1848~1918)の活動は3つ。一つはロンドン王立音楽院の教授として後輩を育てたことである。ブリテンやホルストもパリーのもとで学んでいった。一方、研究者として『オックスフォード版 音楽史』など数々の本を出版し、それらは日本の研究者たちも利用したはずである。そして作曲である。管弦楽を主体として数多くの作品を残したが、どこかメンデルスゾーンやシューマンやブラームスからの影響を感じる。パリーが「ドイツのイギリス音楽」と呼ばれる所以である。交響曲第3番の副題『イングリッシュ The English』については、前述したようにイングランドのことを表したものであり、「イングランド的」あるいは「イングランド人」と解釈すべきだろう。

やま だじゅん 山田純

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、西洋音楽史を平島正郎、海老沢敏に師事。ジャズ音楽史を油井正一に師事、室内楽を小林道夫に師事。専門：アート、マネジメント論、舞台芸術論、音楽評論、日本音楽学会会員、日本アートマネジメント学会中部会長、日本音楽芸術マネジメント学会幹事、名古屋高年大学講師、名古屋市民芸術祭審査員、音楽ベンクラブ会員、世界劇場会議名古屋理事、愛知県文化振興事業団理事、新聞・雑誌のコラム、各種演奏会の曲目解説執筆者。名古屋芸術大学大学院音楽研究科教授。

Profile

